

碩 士 學 位 論 文

程 度 副 詞 「も っ と」 の 研 究

指 導 教 授 金 勝 漢



濟 州 大 學 校 大 學 院

日 語 日 文 學 科

天 野 陽 子

2005年 12月

程度副詞「もっと」の研究

指導教授 金 勝 漢

天 野 陽 子

이 論文을 文學 碩士學位 論文으로 提出함



2005年 12月

제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

天野陽子の 文學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長 _____ 印

委 員 _____ 印

委 員 _____ 印

濟州大學校 大學院 日語日文學科

2005年 12月

Research on the Adverb of Extent
「もっと」 (more)

Yang-ja Chunya

(Supervised by Professor Seung-han Kim)



A thesis submitted in partial fulfillment of the
requirement for the degree of Master of Arts

Department of Japanese Language and Literature

GRADUATE SCHOOL
CHEJU NATIONAL UNIVERSITY

2005. 12.

程度副詞「もっと」の研究

天野陽子

濟州大學校 大學院 日語日文學科

指導教授 金勝漢

이 논문의 주제인 「もっと」는 비교 기능을 가진 정도부사이다. 「もっと」는 정도비교 용법 뿐만이 아니라, 부정적인 용법이나 양에 관한 용법도 지닌 정도부사이다. 이 논문은 「もっと」의 용법을 명확히 함으로서 그 의미기능을 알아내는 것을 목적으로 하였다. 「もっと」의 예문을 용법별로 분류하고 그 의미기능을 고찰한 결과 얻은 내용은 다음과 같다.

1) 「もっと」의 기본적인 기능은 정도를 비교하는 용법이며, 이것을 「程度比較用法」라 한다. 정도비교용법에서 「もっと」구문(構文)은 「XはYよりもっとA」와 같이 모델화할 수 있으며, 이 때 「もっと」는 「X」와 「Y」의 정도를 비교한다. 이 때 「A」는 상태성(狀態性) 및 속성(屬性)을 나타내고 정도성(程度性)을 지닌 말이어야 한다. 정도비교용법의 「もっと」는 비교기준(比較基準)을 필요로 한다. 이 비교기준은 「XはYよりもっとA」처럼 「Y」로 나타낼 수 있으며, 「Y」도 「A」와 같은 상태성 및 속성을 지닌 말이어야 한다. 또한 「もっと」가 「X」「Y」의 정도를 비교하기 위해서 「Y」가 어느 정도 「A」인가에 관해서는 「Xほどではないが、ある程度A」라고 말할 수 있어야 한다. 비교기준(Y)은 「Yより」라는 형태로 문에 나타나는 경우도 있으나, 또 「Y」「A」는 문이나 담화의 전후관계로 인해 문맥에 잠재(潛在)할 경우도 있다.

2) 「もっと」의 또 하나의 용법으로서 「否定強調用法」이 있었다. 「もっと」가 문에서 그 기능을 발휘하기 위해서는 비교기준을 필요로 하지만, 부정강조용법에 있어서는 비교기준이 「A」가 아닌 「~A」가 된다. 이 용법은 「~Aではなくて、もっとA」라는 구문(構文)으로 나타낼 수 있다. 「~A」가 비교기준이 되며 그 것을 「~ではなくて」라고 부정하면서 「もっとA」라 언급하는 이 용법은 「もっと」로 인해 「A」가 더욱 강조(強調)된다. 「もっと」의 부정강조용

법에 있어서는 비교기준(~A)에 나타나는 말이 특정한 값을 나타내는 말이어야 하는데, 이 때 특정한 값이라 하는 것은 반드시 수치(數値)가 아니라도 허용된다. 문이나 담화의 「關心のもと」 즉 관심사항에 대해 발화자(發話者)가 그 정도를 인식하고 그 사항에 대해 특정한 값을 알 수 있으면 그것이 비교기준(~A)가 될 수도 있기 때문이다. 또한 부정강조용법 「~Aではなくて、もっとA」의 「A」에도 정도비교용법과 마찬가지로 상태성을 나타내고 정도성을 지닌 말이 이어야 한다. 이 용법은 비교기준을 부정하고 「A」가 알맞은 값이라는 것을 강조하는 용법이므로 이러한 기능이 더욱 강해지면 「もっと速く走れ!もっと!」와 같이 「もっと」만으로도 명령의 기능을 가지게 된다.

3) 「もっと」는 동사(動詞)도 수식하게 되는데 이 때 「もっと」는 동작의 주체나 대상이 되는 것의 양(量)을 한정하며 이 용법을 「量的用法」라 한다. 이러한 용법은 「もっとV」구문으로 표시할 수 있으며, 「V」에 나타나는 동작의 회수(回数)나 기간(期間)도 양이란 개념이어야 한다.

이러한 「もっと」의 용법 및 기능은 같은 비교 정도부사 「ずっと」 「よほど」와는 차이가 있으며, 또한 「もっと」는 「ずっと」를 수식하는 기능도 갖춘다는 것을 확인할 수 있었다.



程度副詞「もっと」の研究

天野陽子

済州大学校 大学院 日語日文学科
指導教授 金勝漢

本稿のテーマである「もっと」は比較に關わる程度副詞である。「もっと」は、程度比較用法だけでなく、否定的な用法や量的な用法も持つ程度副詞である。本稿はこの「もっと」の用法を明確にすることによって、その意味機能を探ることを目的としている。「もっと」を含む文例を用法別に分け、その意味機能について考察した結果、得られた内容は次のとおりである。

1) 「もっと」の基本的な機能は程度を比較する用法であり、これを「程度比較用法」と呼ぶ。程度比較用法の「もっと」構文は、「XはYよりももっとA」のようにモデル化することができ、この時「もっと」は「X」と「Y」の程度を比較する。この時「A」には、状態性(属性)を表す語が立つが、その語は程度を持つ語でなければならぬ。また、程度比較用法の「もっと」は「比較基準」を必要とする。この比較基準は「XはYよりももっとA」の「Y」として示されるものであり、「Y」は「もっと」が直接修飾する「A」と同様の状態性(属性)を持つ語でなければならない。さらに、「もっと」が「X」「Y」の程度を比較するために、「Y」の「A」性の程度は「Xほどではないが、ある程度A」でなければならない。そして、比較基準(Y)は「Yより」という形で文中に表れる場合もあり、また、「Y」「A」は文や談話の前後關係によって、ともに文中に潜在することもある。

2) 「もっと」のもう一つの用法として「否定強調用法」がある。「もっと」が文中で、その機能を果たすためには、比較基準が必要であるが、否定強調用法においては、比較基準が「A」でない成分、すなわち「~A」となる。この用法は「~Aではなくて、もっとA」という構文モデルで示すことができ、「~A」を比較基準とし、さらにそれを「~ではなくて」と否定しながら、「もっとA」と言及するこの用法は、「もっと」によって「A」がことさら強調される。

「もっと」の否定強調用法においては、比較基準(~A)に立つ語が「特定の値」を示す語でなければならないが、この時の特定の値というのは、必ずしも數値でなくても許容される。文

や談話の関心のまよになっていることについて、発話者がその程度性を認識し、そのことさらに特定の値を与えれば、それが比較基準(～A)になり得るのである。また、否定強調用法「～Aではなくて、もっとA」の「A」にも、やはり、状態を表す程度性を持つ語が立つ。この用法は比較基準を否定し、「A」がふさわしいことを強調する用法であり、このような機能が、さらに強まると、「もっと速く走れ!もっと!」のように、「もっと」だけで、命令を表す機能も認められるようになる。

3) 「もっと」は動詞とも共起するが、この時の「もっと」は動作の主体や対象になるものの量を限定し、この用法を「量的用法」と言う。このような用法は「もっとV」として示すことができ、「V」で表される動作の回数や期間も「量」という概念で捉えられる。

これらの用法および機能は、同類の副詞、すなわち他の比較に関わる程度副詞「ずっと」「よほど」とは異なるものであり、さらに「もっと」は「ずっと」を修飾する機能も持ち合わせていることが確認できる。



目 次

韓国語抄録	i
日本語抄録	iii
1. はじめに	1
1.1. 研究の目的と方法	1
1.2. 副詞	2
1.3. 程度副詞	2
1.4. 「もっと」に関する研究の流れ	3
2. 程度比較用法	4
2.1. 「Y」の特徴	6
2.2. 「A」の特徴	10
3. 否定強調用法	15
3.1. 「～A」の特徴	18
3.2. 「A」の特徴	22
3.3. 構文の特性	23
4. 量的用法	25
5. 「もっと」と「ずっと・よほど」	28
5.1. 程度比較用法における比較	28
5.2. 否定強調用法・量的用法における	30
5.3. 同類の副詞修飾	31
6. 結論	33
参 考 文 献	35
Abstract	37

1. はじめに

1.1. 研究の目的と方法

日本語の中には副詞的な職能を持つ語が豊富であるが、副詞と呼ばれる語群は外面的形態の変化がなく、構文上の共起関係や発話前後の状況を以てしなければ、意味機能および用法を記述することが難しいものが多い。副詞は用言を修飾（限定・強調）する機能を持つと同時に、ある種の体言を修飾するという特殊な機能も備えている。用言は体言と異なり、抽象的な面が濃厚であるが、副詞はその用言を意味上、修飾する立場に立つため、さらに抽象度の高い語群となる¹⁾。抽象度が高いというのは、文の意味の上で、客観的意味が濾過され、その分、叙述内容に対する発話者の状況認識が反映されるということである。言い換えれば、発話者の状況認識を無視しては、その語の意味機能および用法を確認することができないということになる。

その中でも程度副詞と呼ばれるものは、かかる語の程度を限定する語であり、その中には他との比較に関わりながら程度を限定するという複雑な機能を持つものがある。比較の程度副詞である「もっと」は、比較の基準を提示し、二者の程度を比較するばかりでなく、否定的な用法や量的な用法も持つ程度副詞である。また、前述した副詞の特性上、発話者が持つ何らかの状況認識を構文にも及ぼすであろうことが予想される。本稿はこのような点から「もっと」に注目し、その機能および用法をはじめとする特性を整理することを目的とした。

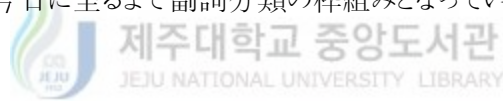
考察の方法は、まず、「もっと」を含む文例をもとに、その用法を明らかにする。次に、用法ごとに構文モデルを提示しながら、構文を構成する成分について考察することによって、「もっと」の機能を明らかにすることにした。

1) 森田良行(2002), 『日本語文法の発想』, ひつじ書房, p101

1.2. 副詞

『国語学大辞典』などの記述をまとめれば、副詞とは「語形変化を持たず、単独で用言または、それ相当の語句を修飾（限定・強調）することを基本職能とする語」である。時枝誠記は、語を概念過程を含む形式と、概念過程を含まない形式に二分し、これを「詞」と「辞」とした。副詞は「一語にして概念と同時に修飾的陳述を含む」とし、「詞」と「辞」の両方の性質を持っているとしている。橋本進吉は、節の切れ目と活用の有無によって詞を分類し、副詞は、自立語のうちで、活用のない語であり、用言を修飾する語であるとした。

副詞は一般的に「わざわざ・ゆっくり」などの情態副詞、「とても・もっと・やや」などの程度副詞、「けっして・おそらく」などの陳述副詞に下位区分される。これは山田孝雄から今日に至るまで副詞分類の枠組みとなっているものである。



1.3. 程度副詞

程度副詞は、状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する副詞をいう²⁾。主として動詞にかかる情態副詞に対して、程度副詞は種々の形容詞および形容動詞を修飾することを基本的な職能とする。程度副詞とされる代表的なものは次のようなものである。「非常に、大変(に)、はなはだ、ごく、すこぶる、極めて、至って、とても / 大分、随分、相当、大層、かなり、よほど / わりあい、わりに、けっこう、なかなか、比較的 / すこし、ちょっと、少々、多少、心持ち、やや」などである。

また、程度副詞の中でも他との比較性の強いものとして、「もっとも、いちばん /

2) 工藤浩(1983), 「程度副詞をめぐって」 『副用語の研究』, 明治書院, p177

もっと、ずっと、一層、一段と、ひときわ、はるかに、よけいに / より」³⁾などがある。

1.4. 「もっと」に関する研究の流れ

渡辺(1986)は、「XはYよりもっとA」のように、「もっと」を含む構文をモデル化し、「A」の語彙的条件、評価的条件、構文的条件を記述することで、「もっと」の意義・用法を整理している。また、渡辺(1990)は、計量構文「Xは(程度副詞)A」と比較構文「XはYより(程度副詞)A」のどちらに立ち得るかによって、程度副詞を分類した。「もっと」は比較構文に立ち、「もっと類」として「ずっと、よほど、いっそう」などをあげている。

佐野(1998)は、比較に関わる程度副詞が「XはYより(程度副詞)A」に立つとき、「YもAである」という前提が必要か否かによって、渡辺が分類した「もっと類」を、さらに「もっと類」と「ずっと類」に区分した。

木下(2001)は、「もっと」を用いた構文の比較基準が発話者の視点にあるとし、現在・現実・現場の状態や、談話の中での比較の直前の部分に示されている状態が「もっと」による比較の基準であるとしている。

「もっと」についての研究の多くは、その共起関係や他の程度副詞との比較という枠組みの中で、その特性が説明されている。

3) 工藤(1983), p178

2. 程度比較用法

「もっと」は比較を表す程度副詞と言われている。一般的に「比較」というのは、二つ以上のもの、あるいは事柄を比べ合わせ、そこに認められる異同を認識することである。程度副詞「もっと」にそのような機能があるとすれば、「もっと」を含む文には、比較するものや事柄と、比較されるものや事柄についての叙述があるはずである。したがって、「もっと」が文中でその機能を果たし、その文が構文論的に許容されるために、必要な共起成分があり、それは文の成立に必要な役割を担っているはずである。

以下は、文や談話の中で「もっと」が用いられる文例である。

- (1) もってする花火もきれいだけれど、うち上げ花火はさいこうにきれい。だって光が、ふつうの光よりももっときれいにみえるから。



제주대학교 중앙도서관
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

朝日新聞 03.08.16

- (2) 「…そして、あなたはあの方が来て以来、急に心配事ができたのね。あの方はきっと、悪い人でしょう」「ええ、わたしにとっては悪い人ですけども…わたしのほうがもっと悪い人かもしれないわ…」

松本泰『宝石の序曲』

(1)の「だって光が、ふつうの光よりももっときれいにみえる」の部分は、「うち上げ花火の光」と「ふつうの光」の「きれいさ」を比較する表現である。これは、

- (3) 打ち上げ花火の光は、ふつうの光よりきれいだ。

という程度の比較を表す文に「もっと」が立ったものであると考えられる。同様に、(2)は、「わたし」と「あの方」の「悪さ」を比較する表現であり、

(4) あの方よりわたしのほうが悪い。

という程度の比較を表す文に「もっと」が立ったものであると考えられる。このように程度の比較を表す文を「程度比較構文」と呼ぶことにすれば、

(5) 打ち上げ花火の光は、ふつうの光よりもっときれいだ。

(6) あの方より、わたしのほうがもっと悪い。

(5)(6)は「もっと」を含む程度比較構文ということになる。(5)は「打ち上げ花火の光はきれいだ」という内容を言及する文であるが、その「きれいさ」の程度を限定するのが「もっと」である。そして、「きれいさ」の程度を限定する基準となっているのが、「ふつうの光」の「きれいさ」であると考えられる。(6)も同様に、「わたし」の「悪さ」を「あの方」を基準として「もっと」が限定していると考えられる。このように、程度比較構文に立ち、述語の程度を限定する「もっと」の用法を「程度比較用法」と呼ぶことにする。

(5)(6)の「ふつうの光」「あの方」は、程度比較構文において「もっと」が述語の程度を限定する基準となっていることから、「比較基準」と呼ぶことができ、「打ち上げ花火の光」「わたし」は「比較基準」から見ると、比較の対象となることから、「比較対象」と呼ぶことができるだろう。

また、(5)(6)の述語「きれいだ」「悪い」は、「もっと」が直接修飾する語であり、ともに形容詞(形容動詞)であることから、ここで仮に「A」とすれば、「もっと」を含む程度比較構文(5)(6)は、次のように表すことができる。

(7) 「比較対象」は「比較基準」よりもっとA

(8) 「比較基準」より「比較対象」のほうがもっとA

(7)(8)は「比較対象」を「～ハ」で取り立てるか「～(ノホウ)ガ」格で言及するかの違いであり、程度比較構文の意味上の差はないものと考えられる。したがって、程度比較用法の「もっと」を含む構文は、

(7) 「比較対象」は「比較基準」よりもっとA

となる。便宜上、「比較対象」「比較基準」をそれぞれ、「X」「Y」とすると、

(9) XはYよりもっとA

となり、これは程度比較用法の構文モデルとすることができる。

2.1. 「Y」の特徴



程度比較用法の「もっと」の意味機能を考察するため、前項でモデル化した「XはYよりもっとA」の成分である「Y」が、どのような特徴を持つかを探ることにする。

「Y」について考察する理由としては、「Y」は比較の基準を示すことから、「もっと」が文中で果たす機能と直接関係することをあげることができる。また、前述したように「もっと」はそれ自体が具体的な意味を表さないため、構文の成分との共起関係や、「もっと」が発話される前後の状況を含めて考えなければ、その意味機能を把握することが難しいと考え、このような考察の方法を取るものである。

- (10) a A：お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。
 B：お正月の方が多くですよ。

b A : お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。

? B : お正月の方がもっと多いですよ。

(10a)(10b)のAは、盆や正月の休みに若者がよく訪れるレジャー施設の来場者数について質問する文であるでしょう。(10a)(10b)のBはこれに対する答えであるが、「もっと」を用いた(10b)のBはなじみにくく、談話が成立していない。(10a)のBに「もっと」が立つことによって、何らかの制約を受けているということである。

(10a)(10b)では、ともに「お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか」というAの質問が先にあるが、これは来場者数について「盆と正月の人出が、どちらがどれだけ多いのか、少ないのか」という情報が全くないことを表している。このような状況では「お正月の方がもっと多い」のように、「もっと」を用いることができないということである。

試しに(10b)のBに「盆も人が多い」という内容を加えたのが(11)である。

(11) A : お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。

B : お盆も人が多いですが、お正月の方がもっと多いですよ。

(11A)の質問に(11B)はよくなじんでおり、この談話は成立すると考えられる。(10a)と(11)の違いはBの「お盆も人が多い」という節の有無である。「お盆も人が多い」という情報が加われば、「お正月の方がもっと多い」と言及できるのである。

(10a)(11)の談話は、盆と正月の人出の程度を比較する文であるため、次のように置き換えることができる。

(12) a お正月はお盆より人が多い。

b お正月はお盆よりもっと人が多い。

(12a)は(10a)を程度比較構文に置き換えたものである。(12b)は(11)を言い換えたものであり、これは比較対象(X)が「お正月」、比較基準(Y)が「お盆」、「A」は「多い」という成分からなる「もっと」の程度比較用法のモデル構文である。(12a)のような程度比較構文に「もっと」が立つためには、「比較基準(Y)も人が多い」という言及および情報がなければ、談話や文が成立しないということが分かる。

このことから確認できるのは、「比較基準(Y)もAである」という認識を発話者が持っていなければ、「XはYよりもっとA」は成立しないということであり、「もっと」の程度比較用法「XはYよりもっとA」が成立するためには、「YもAである」という比較基準がなければならぬということになる⁴⁾。

では、「Y」と「X」の程度はどうであろうか。「XはYよりもっとA」を分かりやすく図にすれば、次のようになる。

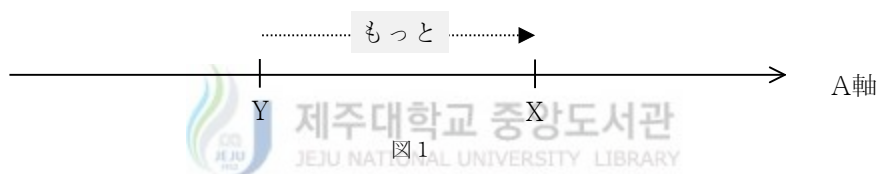


図1のA軸は「来場者の多さ」を表し、右方向に行くほどその程度が大きいものとする。比較対象(X)と、比較基準(Y)は、A軸上にそれぞれの程度を示し、「もっと」は「Y」を比較基準として、「XはA」の程度を限定しているのである。ここで、比較基準(Y)のA性の程度は、図1からも確認できるように、「Xほどではないが、ある程度Aである」と言うことができるであろう。

次に、比較基準(Y)が、どのように文中に表れるかを見ることにする。

4) 渡辺実(1986), 「比較の副詞-「もっと」を中心に-」『学習院大学言語共同研究所紀要』(8), 学習院大学言語共同研究所, p69
佐野由紀子(1998), 「比較に関わる程度副詞について」『国語学』(195), 明治書院, p110

- (13) a 杏子 「今日さあ、図書館に変な人来たんだよね」
正夫 「ボランティアの美山か？」
杏子 「いや、あいつも変だけど、もっと変なやつ」

北川悦吏子 シナリオ『ビューティフルライフ』

- b 今日、図書館に来た人は、ボランティアの美山よりもっと変だ。

(13a)は、「ボランティアの美山」が「変である」程度を比較基準とし、「今日図書館に来た人」が「変である」程度を表す「もっと」の程度比較用法の文例である。なぜなら、比較対象(X)である「図書館に来た人」は「変」であり、比較基準(Y)である「美山」も「変である」ことから、「YもAである」ことが認められ、(13a)の「もっと」が程度比較用法であるということが出来るからである。したがって、これは「XはYよりもっとA」という構文モデルに置き換えることができ、それが(13b)である。このように、「XはYよりもっとA」の比較基準(Y)は、必ずしも助詞「ヨリ」を伴って表されるわけではない。



- (10) b A：お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。
? B：お正月の方がもっと多いですよ。

(10b)の談話において、Aの質問に対するBの答えは許容されなかった。これは、比較基準(Y)が「A」であること、すなわち、「お盆も人が多い」ことが示されないためであった。

- (10) c A：お盆は本当に人が多いですね。お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。
B：お正月の方がもっと多いですよ。

しかし、(10c)ではAの「盆は本当に人が多い」という発言により、比較基準(Y)が示されている。Aの「盆は本当に人が多い」という発言を比較基準(Y)とし、(10b)Bのように答えれば、談話は成立する。(10c)のBは、

(10) d B: お正月の方が(お盆より)もっと多いですよ。

のように、比較基準(Y)が潜在した形であると考えられる。

以上のように、程度比較用法において、「もっと」の発話以前に比較基準(Y)となるものが示されれば、「もっと」を含む文中の比較基準(Y)が省略される場合がある。この場合の「省略」というのは、「必要ない」という意味ではない。(12a)(12b)で確認したように、「もっと」が程度を比較する文に立てば、「もっと」は自動的に程度比較用法を取り、その文が許容可能な文になるためには、比較基準は必須成分である。これは、「比較」という「もっと」の機能からも当然のことと言える。「もっと」を含む文に比較基準が表れていなかったとしても、前後関係の中で示される、あるいは潜在しているということになる。

2.2. 「A」の特徴

次に「XはYよりもっとA」において、「もっと」が直接修飾する「A」の特徴を確認する。まず「A」にはどのような語が立つであろうか。これまで示した程度副詞用法の文例を見ると、(1)「きれいだ」、(2)「悪い」、(12)「多い」、(13)「変だ」のように、形容詞(形容動詞)である。

(14) 顔立ちがふつうの日本人とは明らかに違う姪たちは、私よりもっと大きな戸惑いを母親の祖国に対して抱いているのではないだろうか。

朝日新聞 05.05.04

(14)の「大きな」は連体詞であるが、「もっと」の修飾成分になっている。このような連体詞は形容詞に準ずる性質を持つものと考えられる。以上のような形容詞(形容動詞)、連体詞はともに、**状態性**を表す語であると言える。

(15) くだものは、皮をむくと食べやすいが、種を取れば、もっと{食べやすい/*食べる}。

(15)の「食べやすい」は、「～ヤスイ」という形容詞性接辞によって動詞が形容詞に**転成**したものである。「もっと」が動詞「食べる」を修飾する場合は非文になるが、動作を表す動詞も**状態性**を表す語に**転成**することによって、適格文になることが分かる。

(16) 彼は君よりももっと食べるよ。



(17) 彼は君よりももっと勉強するよ。(渡辺実1986：67)

では、(15)の動詞「食べる」は「もっと」の修飾成分にならなかったの**対し**、(16)の「食べる」は、なぜ「もっと」と共起するのだろうか。同様の構文に、なぜ、(17)には動詞「勉強する」が立つのであろうか。

(18) シャチは餌の種類が多く、水鳥や海生哺乳類も食べる。(「クジラ」の項)

(山岡政紀2003：221)

(18)の「食べる」はシャチ類の動作および作用を叙述しているのではなく、シャチ類の**属性**を表している。このような**属性叙述文**では、動作性の動詞も**状態性(属性)**を表す。

(19) 彼は食べるよ。

同様に、(19)は動作性動詞である「食べる」が、「彼は食欲旺盛な人だ」という「彼」の属性を表す属性叙述文である。(16)の「彼」を比較対象(X)、「君」を比較基準(Y)、「食べる」を「A」とすれば、「彼は食べる」の程度を、「君」を基準として、「もっと」が限定する構文であると考えられる。(17)も(16)と同様の文例であり、(17)の「勉強する」は「彼は勉強家である」という彼の属性を表しているため、「もっと」の修飾成分になり得る。

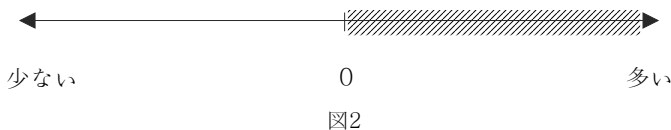
動詞は、本来の意味が動作を表すものであっても、取り立てた主体の属性を表す文章においては、状態述語をつくる。山岡(2003)は、動作性動詞による属性叙述文は、動詞特有の事象性が失われ、主題名詞句に對する一般的属性を、現在時に限定せずに述べる文になるとしている。

このように、取り立てた主体の属性を表す動詞は「もっと」の修飾成分となる。

では、状態性(属性)を表す語の全てが「もっと」の修飾成分になるだろうか。

(20) *この三角形の二辺より、二等辺三角形の二辺のほうがもっと等しい。

「等しい」は形容詞であるが、(1)「きれいだ」、(2)「悪い」、(12)「多い」、(13)「変だ」などの形容詞とはその性質が異なる。例えば、「多い」は「多い-少ない」のように連続する程度性を持つ。このような語は程度スケール⁵⁾に置き換えることができ、「多い-少ない」は図2のように示すことができる。



5) 木下恭子(2001), 「比較の副詞「もっと」における主観性」『国語学』(205), p23で、佐野は程度性を持つ語を程度スケールに置き換えて示している。程度スケールとは状態性を表す語の程度を実線を用いて表したものをいう。

実線は「多い-少ない」の程度スケールである。実線の「0(ゼロ)」より右側は「多い」を示し、右方向に行くほど程度が大きく、左側は「少ない」を示し、左方向に行くほど程度が大きいものとする。この程度スケール上で「多い」というのは、「0」より右方向の実線上、すなわち斜線部分のどこに位置しても「多い」と言える。したがって、「多い」は程度性を持つ形容詞であると言える。

では、「等しい」はどうであろうか。「等しい」は「等しい-?」のように連続した程度性、すなわち、「多い」が図2の斜線部分を表したのとは異なり、程度性を持たない形容詞であると言える。

(20)の「この三角形の二辺」を比較基準(Y)、「二等辺三角形の二辺」を比較対象(X)、「等しい」を「A」とすると、「XはA」すなわち、「二等辺三角形の二辺は等しい」であり、「比較基準(Y)もA」すなわち、「この三角形の二辺も等しい」になり、比較基準(Y)が「二辺が等しい三角形」すなわち「二等辺三角形」ということになる。比較対象(X)も比較基準(Y)も二等辺三角形ということになれば、「Yもある程度A」であるとは言えなくなる。したがって、比較対象(X)と比較基準(Y)を比較することができない。

以上のように、「XはYよりもっとA」の「A」には、形容詞(形容動詞)をはじめとする状態性(属性)を表す語が立ち、それらの語は程度性を持つ語でなければならない。

これまで見てきたように、「XはYよりもっとA」においては、「XはA」であり「YもA」でなくてはならないため、「A」は「X」と「Y」に共通する属性であるとともに、「もっと」の持つ「比較」という機能から見れば、「X」と「Y」を比較するテーマをとなっている。したがって「XはYよりもっとA」の「A」は「もっと」が直接修飾する成分であるとともに、「比較のテーマ⁶⁾」であるとも言える。

(17) 彼は君よりもっと勉強するよ。

6) 佐野(2004), 「「もっと」の否定的用法について」『日本語科学15』, 国立国語研究所, p12で佐野は「XはYよりもっとA」の「A」を「比較テーマ」であるとしている。

(21) a おまえはお兄ちゃんよりも、もっと勉強しないといけないよ。

b おまえはお兄ちゃんよりも、もっと{真面目に/一生懸命に}勉強しないといけないよ。

(17)の「勉強する」は主体の属性を表したが、(21a)の「勉強する」は「～ナイイケナイ」という当為のムードによって、主体の動作を表していることが認められる。(21a)は、例えば、兄の勉強に対する態度(真面目さや熱心さなど)が、発話者の関心のまど⁷⁾になっている状況で、真面目に勉強しない兄を比較基準(Y)とし、弟に「兄より一生懸命勉強する」ことを言い聞かせるものであるとしよう。(21a)は(21b)のように、「XはYよりA」の「A」が省略されたものであると考えることができる。すなわち、比較対象(X)は「おまえ」、比較基準(Y)は「お兄ちゃん」、「A」は「真面目に/一生懸命に」であり、比較のテーマ(A)が潜在した「XはYよりもっとA」構文であると言える。(21a)で「もっと」が修飾するのは、潜在する比較のテーマ(A)すなわち、「真面目に/一生懸命に」であると考えられる。

このように「程度比較用法」の比較のテーマ(A)は、談話の状況によって、文中に潜在する場合がある。

7) 寺村秀夫(1991), 『日本語のシンタクスと意味』(Ⅲ), p63では、「トイレは、あの階段を上ったところにあります」のような文において、場所が関心のまどになっているという説明がある。関心のまどとは、談話においての関心事、発話者の関心事をいう。

3. 否定強調用法

これまでの考察で、程度比較用法の構文「XはYよりももっとA」では、比較基準(Y)も「A」でなければならなかった。これは、(13a)や(10c)Bのように、比較基準(Y)が「Yより」の形で表されなかったとしても、同様であった。では、「もっと」を含む文例の中で、比較基準(Y)が「Aである」と言えないものがあるとしたら、それは「もっと」の別の用法だということになる。

- (22) a 僕は1600ccの小さな車に乗っていたのだけれど、いろいろな人に「村上さんはお金があるんだから、こういうのじゃなくてももっと高い車を買ったらどうですか」と言われた。

村上春樹『やがて哀しき外国語』



- b いろいろな人に「村上さんはお金があるんだから、1600ccの小さな車じゃなくてももっと高い車を買ったらどうですか」と言われた。

まず、(22a)の比較基準(Y)は何であるかを探ることにする。文を構成する成分から推し、仮に「こういうのじゃなくて」の部分と比較基準と考えることができるだろう。なぜなら、比較基準は必ずしも「Yより」の形で表されるわけではないからである。「こういうの」は文脈の意味上、「1600ccの小さな車」であることから、(22b)のように置き換えられる。

ここで、(22b)の「もっと」が程度比較用法であるかについて、確認してみる。「もっと」が直接修飾する「A」は「高い」であり、これは状態を表し、程度性を持つ語である。次に、比較基準が「YもAである」ことについて見ることにする。(22b)の「もっと」を程度比較用法であると考え、「YもA」という内容は「1600ccの小さな車も高い」になる。しかし、(22b)では「いろいろな人」が「村上」に「お金が

あるんだから...高い車を買ったらどうですか」と言っている。これは、お金があるのに高い車に乗らない村上に対し、高い車に乗ることを、「~たらどうですか」と提案する表現である。このことから見ても、発話者は「1600ccの小さな車」が高価な車であるという認識を持っておらず、「YもAである」という内容が認められない。別の文例を見ることにする。

(23) 「小泉さんの民営化法案は冷めたスープの伸びたラーメン。こんなもの食えない。...伸びためん、冷めたスープじゃなくて、もっとうまいラーメンをつくって食おうじゃないか」

朝日新聞 05.09.03

(23)で「もっと」が修飾する「A」は、「うまい」である。文中の成分で比較基準(Y)となり得るものは、「伸びためん、冷めたスープ」であると考えられるが、「伸びためん、冷めたスープ」は「食えない」と言及していることから、発話者が「伸びためん、冷めたスープ」は「うまい」、すなわち「YもAである」と認識しているとは考えられない。前章の2.1.で記述したように、程度比較用法の比較基準が「もっと」の発話以前に示され、省略されたと考えることもできる。しかし、ここでは、(22b)の「1600ccの小さな車」、(23)の「伸びためん、冷めたスープ」のように、「YもAである」と言えない成分、すなわち「Yは~Aである」という成分が比較基準であると考え。そして、これが程度比較用法とは異なる「もっと」の用法であるとして、考察を進めることにする。

次に、比較対象について考えてみる。程度比較用法の構文「XはYよりももっとA」における「もっと」の機能は「比較」であり、その機能は「Y」という標を基に果たされている。「Y」を基準とすれば、「X」は比較の「対象」となる。(22b)(23)で、「1600ccの小さな車」「伸びためん、冷めたスープ」を比較基準とすれば、それぞれの文中の成分のうち、その対象となるものを見ると、「1600ccの小さな車」に対しては「高い車」であり、「伸びためん、冷めたスープ」に対しては「うまいラーメン」であると考えられる。したがって、この用法においては、程度比較用法で「X」とされ

た比較対象が「A」として表されていることが確認できる。

さらに、程度比較用法で「A」は、「もっと」が直接修飾する成分であるとともに、比較対象(X)と比較基準(Y)を比較するための「比較のテーマ」であった。(22b)(23)では比較対象が「高い車」「うまいラーメン」であり、これは「もっと」が直接修飾する「A」である。したがって、(22b)(23)のような「もっと」の用法において、「A」は「比較のテーマ」ではない。

この用法について、さらに掘り下げるため、まず、文例をモデル化してみることにする。「もっと」が直接修飾する語が「A」であり、比較基準(Y)は、前述したように「~A」と表すことができる。また、(22b)(23)では、比較基準となる「~A」が「~ジャンクテ」「~デハナク」を伴って表されている。さらに、程度比較用法で「X」であった比較対象が、ここでは「A」であることから、このような文例を

(24) ~Aではなくて、もっとA

とモデル化することができる。さらに、「比較基準」と「比較対象」の関係は

(25) 「比較基準」ではなくて、もっと「比較対象」

のように示すことができるだろう。

ここで「もっと」の機能は何であろうか。「もっと」は本来、程度を持つ状態性の語を限定する機能を持つ。(22b)(23)においても、勿論、「高い」「うまい」を限定していると言えるだろう。しかし、「~Aではなくて、もっとA」の構文では、「Aではないもの」すなわち、「~A」をわざわざ比較基準とし、さらにそれを「~ではなくて」と否定しながら、「Aだ」と叙述している分だけ、「A」がことさら「強調」されているように感じる。

例えば(22b)で、「いろいろな人」の関心のまとは「村上が乗るべき車」であり、これについて「それは高い車だ」と言及するのに、「~Aではなくて、もっとA」の形にすると、「A」が強調されるのである。言い換えれば、談話や文の発話者は関心

のまになっていることがらについて、「Aがふさわしい(村上が乗るべき車は高いものがふさわしい)」と叙述するため、「~A」を否定し、「もっと」で「A」を限定・強調している。このようなことから、この用法を「もっと」の「否定強調用法」と呼ぶことにする。

3.1. 「~A」の特徴

否定強調用法の「もっと」の意味機能を明確にするため、構文モデル「~Aではなく、もっとA」を構成する「比較基準(~A)」の特徴を考察する。

- (26) a A：家まで近いんですか。
B：いいえ、近くないですよ。遠いですよ。
- b A：家まで近いんですか。
* B：いいえ、近くないですよ。もっと遠いですよ。

(26a)(26b)はともに、家までの距離について、Aの「近いんですか」という質問について、Bがそれを否定し、「遠い」と言及する談話である。(26a)と(26b)の違いは、Bの答えに「もっと」が立つか立たないかである。では、なぜ「もっと」がBに立つと談話が成立しないのかを考えてみる。(26b)は「もっと」が立つことによって、「近い」という比較基準を否定しながら、家までの距離について「もっと遠い」と言及する「もっと」の否定強調用法の文例であると考えられる。(26b)のBを否定強調用法の構文モデル「~Aではなくて、もっとA」に置き換えると、「A」は「遠い」であり、比較基準(~A)は「近い」である。「遠い」に対して「近い」は、「A」に対して「~A」であるため、この文は「もっと」の否定強調用法の文例のはずであるが、文中の何らかの成分がなじまないために、非文になっているものと考えられる。

- (27) A：家まで5キロくらいですか。
 B：いいえ。(5キロじゃありません) もっと遠いですよ。

ここで、比較基準(~A)を「5キロ」にすると、(27)のように、談話が成立する。比較基準(~A)の成分として、なぜ「近い」は不適格なのであろうか。前章の2.2で考察したように、「近い」のような形容詞は「近い-遠い」のように連続する程度性を持つ。程度スケールに置き換えれば、図3のようになるだろう。

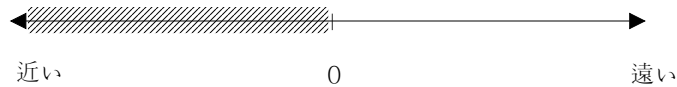


図3

実線は「遠い-近い」の程度スケールである。実線の「0(ゼロ)」より左側の斜線部分が「近い」を示している。

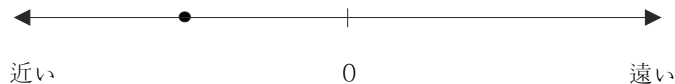


図4

一方、5キロは具体的な値であるため、程度スケール上に示すとすれば、図4のように点として表すことができる。ここで、(27)の比較基準(~A)である「5キロ」は、程度スケール上の「近い」を示す範囲内になければならない。なぜなら、(26)(27)の談話において、関心のまとは「家までの距離」にあり、それは「遠い」というのが、Bの言い分である。「家までの距離」が「遠い」と言及するために、示された「5キ

ロ」を否定するのは、「5キロ」という値に**対して**、Bが「遠い」という認識を持たないためである。仮に「5キロ」もある程度「遠い」という認識があれば、

- (28) A：家まで5キロくらいですか。
B：(それより)もっと遠いですよ。

(28)のような談話になり、この時のBは、程度否定用法の比較基準(Y)が省略された文例であると考えられる。

以上のように、「もっと」の否定**強調**用法の構文モデル「~Aではなくて、もっとA」において、比較基準(~A)に立つ成分は「近い」のような程度性を持つ語ではなく、「5キロ」のように「特定の値」を示す成分⁸⁾であると言うことができ、その値に**対して**発話者が「Aではない」「~Aである」という認識を持っていることになる。

この場合の「特定の値」というのは、必ずしも**数**で表されるわけではない。

- (29) A：モデルさんですか。
B：いいえ、もっと地味な仕事ですよ。(佐野由紀子2001：14)

(29)の談話において、Aが言及した「モデル」は普通名詞であるが、特定の値を示す比較基準になっていると考えられる。この談話でAとBの**関心**は「Bの職業」にある。Bは、職業の位相が「派手だ-地味だ」という程度スケールを用い、Aによって示された「モデル」という職業に、特定の値を与えているのである。これは、例えば図5のように示すことができる。

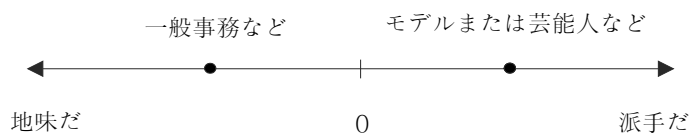


図5

8) 佐野(2004), p14

職業の位相を表す「派手だ-地味だ」という程度スケール上には、いろいろな職業が、それぞれの値を示すことができる。Bはここで、「モデル」に特定の値を与え、それを比較基準(~A)として、自分の職業は「もっと地味だ」と言っている。仮に、業務が「きつい-楽だ」という程度スケールを用いたとすれば、

(30) A：モデルさんですか。

B：いいえ、もっと楽な仕事ですよ。

という談話になるはずである。(22b)(23)も「高い-安い」「うまい-まずい」という程度スケール上に、「1600ccの小さな車」「伸びためん、冷めたスープ」が、それぞれの値を持つものであると考えられる。

また、比較基準(~A)が示す特定の値は、次のように表されることもある。

(31) a A：あなたの部屋も、こんなに狭いの。

B：ううん。もっと広いわよ。

b A：あなたの部屋も、狭いの。

*B：ううん。もっと広いわよ。

(32) a わたしが飼っている犬は、あんなに怖くないわ。もっとかわいいわよ。

b *わたしが飼っている犬は、怖くないわ。もっとかわいいわよ。

(31a)(32a)の比較基準(~A)は、「こんなに狭い」「あんなに怖い」である。(31a)は「こんなに」という語から、狭い部屋を実際に見ながらの談話であると考えられ、(32a)は犬の「怖さ」を発話以前に確認している場合に可能な発話である。目前で、あるいは過去に確認している程度は、「こんなに」「あんなに」という語とも

に、特定の値を示すことになり、否定強調用法の比較基準(~A)の成分になると考えられる。

- (33) a 涼子：ママったら恋する少女みたいに、もう何も見えなくなっちゃってるのよ。
逸平：少女はもっと可憐だよ。あれじゃただの色気狂いだ。

成島出 シナリオ『笑う蛙』

- b 逸平：少女は(あんなふうじゃなくて)もっと可憐だよ。あれじゃただの色気狂いだ。

さらに、程度比較用法の比較基準(Y)が潜在したように、否定強調用法においても比較基準(~A)が文中に潜在する場合がある。(33a)で逸平は、「少女は可憐だ」と言及するために「もっと」を用いているが、この場合、「ママ」については「色気狂いだ」と言っていることから程度比較用法ではなく、(33b)のような否定強調用法であると考えられ、比較基準(~A)が潜在した形であると判断できる。

3.2. 「A」の特徴

これまでに例示した「~Aではなくて、もっとA」の「A」は、(22)「高い」、(23)「うまい」、(27)「遠い」、(29)「地味だ」、(30)「楽だ」、(31)「広い」、(32)「かわいい」、(33)「可憐だ」など、状態を表す程度性を持つ語であった。これは、「程度比較用法」の「A」と同様である。

しかし、次のような文例もある。

- (34) 死刑ではなくてもっと別の判決を下してほしい。

- (35) ただ、今までのように、教育委員会の事務局が、いろいろな議案をつくって、それをただ単に承認していくというような形ではなくて、もっと違った形で機能したらどうだろうか。

朝日新聞「転機の教育」

- (36) 地域のネットワークだけではなく、もっと他の環境の人とのネットワークを作ることが大切だ。

「もっと」の否定強調用法では、「別の(に)」「他の(に)」「違う(違った)」「異なる(異なった)」など、程度性を持たず、一般的には程度を限定することのできない語も「A」の成分になり得る。否定強調用法の「もっと」は、示された情報「~A」を否定し、「A」がふさわしいことを強調するものであるため、「~A以外のもの」すなわち「既存のものを否定する語」である「別の(に)」「他の(に)」「違う(違った)」「異なる(異なった)」などの語とも共起する⁹⁾と考えられる。



3.3. 構文の特性

この項目では、程度比較用法には見られない、否定強調用法の特性を整理する。

一般的に「もっと」を含む文例を見ると、「もっと」は命令文に用いられることが多いようである¹⁰⁾。次のような文例である。

- (37) もっと速く走れ。

9) 渡辺(1986), p73、佐野(1998), p109

10) 渡辺(1986), p73、佐野(1998), p109

(37)は、グラウンドを走る選手にコーチが命令している文であるとする。この「もっと」の用法は、程度比較用法と否定強調用法のどちらも考えられるだろう。

(38) (今の速度より)もっと速く走れ。

(39) (そんな走り方じゃなくて)もっと速く走れ。

グラウンドを走る選手の速度が「ある程度は速い」という認識がコーチにあれば、(38)のように、程度比較用法と考えることができ、現在の状態を「速い」と認めていないのであれば、(39)のように、否定強調用法と考えられる。

(40)) a もっと速く。 もっと速く。

b もっと! もっと!

しかし、(40a)のように、選手に継続的に加速を要求する場合は、現在の状況を否定し、「もっと」によって「速く(走る)」ことを強調する否定強調用法であるように感じられる。(40b)は(40a)の「もっとA」の「A」が潜在した形であり、「もっと」だけでも「速く走る」ことを命令しているように感じられる。否定強調用法の「もっと」は、比較基準を否定し、比較対象を強調する機能を持つ。「もっと」が比較対象を強調する傾向がさらに進めば、「A」であることを命令し、「A」が修飾する動作にも「もっと」の影響が及び、「速く走る」ことを命令する機能さえも「もっと」は備えていると言うことができる。

4. 量的用法

次に、程度比較用法、否定的用法とは異なる「もっと」の用法と思われる文例をあげる。

(41) その横で車いすに座る平田氏も「雇用、年金、財政構造改革など、やるべきことはもっとあるんです。郵政民営化は争点ではない」と切り捨てた。

読売新聞 05.08.27

(41)の「もっと」は「ある」の程度を限定しているのではない。「やるべきこと」の「量」に対して「もっとある」と述べている。「ある」は状態を表す動詞であるが、「ある-ない」には連続的な程度性が認められないため、「もっと」が「ある」という状態(動詞)の主体となる「やるべきこと」の量的な側面を限定するのではないかと考えられる。

(42) 数日前から親鳥が卵をあたためていた。今朝、ひなを一匹確認したが、卵はまだ何個か残っているようなので、もっと生まれるだろうと期待している。

(42)の「もっと」は、「もっと」が直接かかる「生まれる」を修飾しているのではなく、「ひな」の量的な側面を限定していると考えられる。森山(1988)では「生まれる」について、「主体変化の起こる一点的な時だけが取り上げられる動詞」であり、このような動詞は「結果が持続するものでもなく、動きが一点的」¹¹⁾であるとしている。「もっと」が一点的な動きを表す動詞と共に起する場合、動作の主体の量的な側面を限定するものと考えられる。

量的な側面を限定する「もっと」の用法を「量的用法」と呼ぶことにし、考察を進めることにする。これをモデル化すれば、

11) 森山卓郎(1988), 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院, p154

(43) もっとV

と表すことができる。

量的用法の「もっと」が量を限定するのは、動作の主体だけではない。次のような動詞との共起を考察してみる。

(44) 道子「ほらヤス、もっと食べなさい、ヤス」

平田「はあ...すみません」

道子「もりもり食べなさい、ヤスなんだから」

宮本官九郎 シナリオ『GO』

(45) そしてこっちもギンネコ号のためにできるだけのべんぎをはかりたいが、もし水や食糧品でもたりなければ、もっとおゆずりしてもいいといった。



(44)は、焼肉店での談話である。おそらく、平田の前では肉がたくさん焼かれているであろう。この場合、「もっと」が限定するのは、焼き肉の量であると考えられる¹²⁾。(45)の場合も同様に、「もっと」が限定しているのは「ゆずる」という動作の対象である「水や食糧品」の量である。このように、動作が対象を伴い、動作とともに対象の量の累加が認識されるとき、「もっと」は動作の対象の量を限定すると言える。

では、動作が対象を伴うが、動作とともに対象の量に変化のない場合や、談話や発話者の関心が対象の量的な側面でない場合は、「もっと」がどのような側面を限定するかを見ることにする。

12)『国語学大事典』の「程度副詞」の項(p745)には「ごはんをもっと食べなさい」が量の用法であると記述されている。

(46) 約束時間を過ぎても彼女は来ない。でも、もっと待つことにする。

(46)の「待つ」という動作の**対象**は「彼女」であるが、「待つ」という動作を**続**けても**対象**である「彼女」の量が増えるのではなく、動作とともに**対象**の量の累加が認識されない。このような場合は「待つ時間」の量的側面が「もっと」の限定を受けると考えられる。

(47) 部長「加藤君は、一週間にどのくらい**飲む**の?」

加藤「酒は弱くて...一ヶ月に一回くらいでしょうか....」

部長「若いんだから、もっと**飲んで**もいいんじゃない?」

(47)は「**飲む**」という動作の**対象**である「酒」が省略されている。「**飲む**」という動作とともに**対象**である「酒」に量変化はあるが、(47)の談話の**関心**は「酒を**飲む回数**」にある。このような場合、「もっと」は**関心**のまとなっている「**回数**」の量的側面を限定する。



5. 「もっと」と「ずっと・よほど」

「もっと」は比較の程度副詞である。程度副詞の中で比較に関わるものには「もっと」の他に「ずっと、よほど」があり、これらは「もっと類」とされる¹³⁾。これらの語が「程度の比較」という同じ機能を持ちながらも、ひとつひとつ淘汰せずに使われるのは、その語ごとに機能や用法、発話者の状況認識の有り様が異なるからであろう。

この項では、これまで考察した「もっと」の特性を、「ずっと、よほど」と比較することで、比較の程度副詞の中での「もっと」の意味機能をさらに明確にしたい。

5.1. 程度比較用法における比較

「もっと」の程度比較用法の文例に「ずっと、よほど」が立つことができるかを確認しながら、「もっと」と「ずっと」、「もっと」と「よほど」をそれぞれ比較してみる。

(48) A：お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。

B：お盆も多いですが、お正月の方が もっと/ずっと 多いですよ。

前項で程度比較用法の構文モデル「XはYよりもっとA」においては、「YもAである」という比較基準(Y)が必要であることを記述した。(48)の「お正月の来場者数」は比較対象(X)、「お盆の来場者数」は比較基準(Y)、「多い」は「A」であり、「お盆も多い」という節によって「比較基準(Y)もA」であることが示されている。(48)では「もっと」「ずっと」ともに許容される。次に「お盆も多い」という節のな

13) 渡辺(1990), p3

い談話に「もっと」と「ずっと」を入れてみたものが、(49)である。

(49) a : お盆とお正月は、どちらの方が人が多いですか。

b : お正月の方が {もっと/ずっと} 多いですよ。

「もっと」は「比較基準(Y)もA」であることが示されない(49)で制約を受け、「ずっと」は制約を受けない。このことから、「もっと」と「ずっと」が程度比較文「XはYより__A」に立つとき、「もっと」には「比較基準(Y)もA」という条件が必要であるが、「ずっと」はそのような制約を受けないと言える。

次に「もっと」と「よほど」を比較することにする。

(50) この本の方が、あの本より {もっと/よほど} おもしろい。

(50)は、程度比較構文「この本の方が、あの本よりおもしろい」に程度副詞「もっと」「よほど」が立ったものである。ここでは、「もっと」「よほど」ともに構文になじんでいる。しかし、副詞の意味上、「もっと」が立てば、比較基準(Y)すなわち、「あの本」は「ある程度おもしろかった」ということになるが、「よほど」が立つと、比較基準(Y)すなわち、「あの本」は「おもしろくなかった」という発話者の認識を示すようになる。

(51) あの本はおもしろかった。でも、この本は {もっと/*よほど} おもしろい。

(52) あの本はおもしろくなかった。この本の方が {*もっと/よほど} おもしろい。

(51)は「あの本はおもしろい」という「比較基準(Y)もA」が示された文例である。この文例には「よほど」はなじまない。(52)のように「あの本はおもしろくなかった」という内容が示されると、「もっと」は不適格であり、「よほど」は許容される。したがっ

て、程度比較構文に「もっと」「よほど」が立つ時、「もっと」の比較基準(Y)は「A」であるが、「よほど」の比較基準(Y)は「A」であるとは言えない¹⁴⁾。

5.2. 否定強調用法・量的用法における比較

「もっと」は比較の程度副詞でありながら、否定強調用法・量的用法を持つが、これらの用法は「ずっと」「よほど」にはないものである。

(22) c 「村上さんはお金があるんだから、1600ccの小さな車じゃなくて {もっと/*
ずっと/*よほど} 高い車を買ったらどうですか」

(30) A : モデルさんですか。
B : いいえ、 {もっと/*ずっと/*よほど} 楽な仕事ですよ。

(53) {もっと/*ずっと/*よほど} 他の意見はありませんか。

(54) *ずっと速く! ずっと! ずっと!

(55) *よほど速く! よほど! よほど!

(22c)(30)(53~55)から、否定強調用法および量的用法は、「ずっと」「よほど」にはないものであることが確認できる。一方、量の用法では「ずっと」が共起するかのように見える。

(47) 約束時間を過ぎてても彼女は来ない。でも、 {もっと/ずっと/*よほど} 待つことにす

14) 渡辺(1986), p69

る。

しかし、これは「ずっと」が時間的な連続を表す情態副詞として動詞を修飾するもので、本稿で考察した「量の用法」とは異なるものである。

5.3. 同類の副詞修飾

程度副詞は副詞を修飾するという、一般に副詞が持たない機能を持つ¹⁵⁾ことが知られている。比較の程度副詞は状態性の語の程度を限定する機能を持つため、一部の情態副詞の程度を限定する。

(56) うちリビングより、キッチンの方が{もっと/ずっと/よほど}ゆったりしている。



では、「もっと、ずっと、よほど」という「もっと類」の中での修飾関係を見ることにする。

(57) あの、「グラウンド・ゼロ」と呼ばれるようになったビル崩壊の現場近くには、もっとずっと大変な体験、生きるか死ぬかといった目に遭った人たちがたくさんいたはずで、彼らに比べればわたしの体験などは生ぬるいというほどにも値しないものだろう。

朝日新聞 05.09.23

(57)の「ずっと」は比較の程度副詞であり、これは「もっと」の修飾を受けている考えられる。では、「もっと」と「ずっと、よほど」の相互の共起関係はどうだろうか。

15) 山田(1936), 『日本文学概論』, 宝文館出版, p386

(58) もっと {ずっと/*よほど} 大変な体験...

(59) ずっと {*もっと/*よほど} 大変な体験...

(60) よほど {*もっと/*ずっと} 大変な体験...

(58~60)で確認できるように、「もっと」は同類の副詞「ずっと」を修飾する機能を持つが、「ずっと、よほど」は同類の副詞を修飾しない。「もっと」は程度を限定する副詞自体の程度をさらに、限定する機能を持つことが確認できた。



6. 結 論

本稿の考察によって、「もっと」は程度比較用法、否定強調用法、量的用法を持つことが明らかになった。「もっと」が程度比較用法で文に立つとき、その文は「XはYよりもっとA」のように、モデル化することができ、「X」を比較対象、「Y」を比較基準、「A」は比較のテーマと呼ぶことができる。この時「もっと」は「X」と「Y」の程度を比較する。「A」には、状態性(属性)を表す語が立ち、その語は程度を持つ語でなければならない。また、程度比較用法の「もっと」は「比較基準」を必要とする。この比較基準は「XはYよりもっとA」の「Y」として示されるものであり、「Y」は「もっと」が直接修飾する「A」と同様の状態性(属性)を持つ語でなければならない。さらに、「もっと」が「X」「Y」の程度を比較するために、「Y」の「A」性の程度は「Xほどではないが、ある程度A」でなければならない。そして、比較基準(Y)は、必ずしも「Yより」という形で文中に表れるのではなく、また、「Y」「A」は、文や談話の前後関係によって、ともに文中に潜在することがある。

否定強調用法では、比較基準が「A」でない成分、すなわち「 $\sim A$ 」となる。この用法は「 $\sim A$ ではなくて、っとA」という構文モデルで示すことができ、「 $\sim A$ 」は比較基準であり、「A」が比較対象となる。「 $\sim A$ 」を比較基準とし、さらにそれを「 \sim ではなくて」と否定しながら、「もっとA」と言及するこの用法は、「もっと」によって「A」がことさら強調される。また、「もっと」の否定強調用法においては、比較基準($\sim A$)に立つ語が「特定の値」を示す語でなければならないが、この時の特定の値というのは、必ずしも数値でなくても許容される。文や談話の関心のまとなっていることがらについて、発話者がその程度性を認識し、そのことがらに特定の値を与えれば、それが比較基準($\sim A$)になり得るのである。否定強調用法「 $\sim A$ ではなくて、っとA」の「A」にも、やはり、状態を表す程度性を持つ語が立つ。この用法は比較基準を否定し、「A」がふさわしいことを強調する用法であるため、このような「もっと」の機能が、さらに強まると、「もっと」だけで、後続する状態や、そ

れに伴う動作を命令するような機能も認められるようになる。

量的用法では、「もっと」が動作の主体や対象になるものの量を限定する。このような用法は「もっとV」として示すことができ、「V」で表される動作の回数や期間も「量」という概念で捉えられる。

「もっと」が文中で各機能を果たすためには、比較対象、比較基準といった成分が必要となる。しかし、文や談話における語句の省略はいつでも可能であり、その場合、それらの成分は文や談話の中に潜在する形を取る。本稿の考察では、比較対象や比較基準が文や談話で明示されなくても、「もっと」は、文や談話において、取り立てられた主題や、発話者が関心を置くことがらに対し、その程度や量を限定し、あるいはふさわしい程度を示す機能を持つことを確認した。さらに、このような用法および機能は、同類の副詞「ずっと」「よほど」とは異なるものであると言える。



参 考 文 献

< 文例出典 >

朝日新聞

読売新聞

海野十三 『怪星ガン』

北川悦吏子 シナリオ 『ビューティフルライフ』

成島出シナリオ 『笑う蛙』

松本泰 『宝石の序曲』

宮本官九郎 シナリオ 『GO』

村上春樹 『やがて哀しき外国語』

< 外国文献 >



< 単行本 >

国語学会(1982), 『国語学大辞典』, 東京堂出版

国立国語研究所(1991), 『副詞の意味と用法』, 大蔵省印刷局

寺村秀夫(1991), 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』, くろしお出版

森田良行(2002), 『日本語文法の発想』, ひつじ書房

山岡政紀(2003), 『日本語の述語と文機能』, くろしお出版

山田孝雄(1936), 『日本文法学概論』, 宝文館出版

< 論文 >

奥村大志(1995), 「「もっと」についての考察」 『日本語教育』(87), 日本語教育学会

木下恭子(2001), 「比較の副詞「もっと」における主観性」 『国語学』(205),

日本語学会

- 工藤 浩(1983), 「程度副詞をめぐって」 『副用語の研究』, 明治書院
- 佐野由紀子(1998), 「比較に関わる程度副詞について」 『国語学』 (195), 日本語学会
- _____ (2004), 「「もっと」の否定的用法について」 『日本語科学』 (15), 国立国語研究所
- 森山卓郎(1981), 「程度副詞と動詞句」 『京都教育大学国文学会誌』 (20), 京都教育大学国文学会
- 渡辺 実(1986), 「比較の副詞-「もっと」を中心に-」 『学習院大学言語共同研究所紀要』 (8), 学習院大学言語共同研究所
- _____ (1990), 「程度副詞の体系」 『上智大学国文学論集』 (23), 上智大学国文学会



<Abstract>

-Research on the Adverb of Extent 「もっと」 (more)-

Yang-ja Chunya

Department of Japanese Language and Literature,
Graduate School, Cheju National University

Supervised by Professor Seung-han Kim

「もっと」, the theme word of this paper, is an adverb of extent with a comparison function. However, in addition to the comparison function, it also serves other purposes. The focus of this paper is to determine these functions by examining the usage of 「もっと」.

1) The basic function of 「もっと」 is to compare the degree (or extent). This is called the 'Extent Comparison Usage'. In this usage, the model sentence can be 「XはYよりもっとA」(X is more A than Y). In this sentence, 「もっと」 compares the extent or degree of difference between 「X」 and 「Y」. In this example, 「A」 is the word indicating a certain state with a particular degree. In the extent comparison usage, 「もっと」 needs a comparison standard. This comparison standard can be 「Y」 in 「XはYよりもっとA」. 「Y」 also should be the word with characteristics like 「A」 which is modified directly by 「もっと」. Moreover, in order for 「もっと」 to compare the extent between 「X」 and 「Y」, regarding the extent of 「Y」 on 「A」, it should be said that 「Xほどではないが、ある程度A」(Y is somewhat A even though it is not comparable to X). In this sentence, the comparison standard (Y) is not necessarily referred to and 「Y」 and 「A」 can be masked by the context.

2) Another usage of 「もっと」 is the 'Negative Emphasis Usage'. In order for 「もっと」 to serve this function in a sentence, it requires the comparison standard. However, in the negative emphasis usage, the comparison standard is 「~A」(negative A) not 「A」. Accordingly, the sentence of this usage can be 「~Aではなくて、もっとA」(It is not

negative A but more A). In this sentence, the comparison standard is 「~A」 and it is enjoined by 「~ではなくて」. Moreover, due to 「もっと」 in 「もっとA」, 「A」 receives more emphasis. In this usage, the comparison standard (~A) should indicate particular value. The particular value is not necessarily numerical. If the speaker recognizes the extent of the point of interest and assigns it a particular value, it can serve as the comparison standard (~A). Moreover, 「A」 in 「~Aではなくて、もっとA」 is the word which identifies the state and the extent. The negative emphasis usage nullifies the comparison standard and emphasizes that 「A」 has proper value. If the function of 「もっと」 of this usage gets stronger, 「もっと」 will possess the imperative function as in the example 「もっと速く走れ! もっと!」 (Run faster! More!).

3) 「もっと」 also modifies verbs. In this case, it limits the quantity of the subject or object. This is called the 'Quantitative Usage'. This usage is referred to as 「もっとV」. The number and time of the activity in 「V」 should be defined as quantity.

This usage and function is not used with other adverbs of extent such as 「ずっと」 and 「よほど」(more). In addition, it is established that 「もっと」 modifies 「ずっと」.